



Title	1950年代『プレゼンス・アフリケーヌ』と言語の政治：未完の脱植民地化と普遍の罨
Author(s)	砂野, 幸稔
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2024, 35, p. 136-156
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95325
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1950年代『プレザンス・アフリケーヌ』と言語の政治
— 未完の脱植民地化と普遍の罠 —
Présence Africaine in the 1950s and the politics of language:
Unfinished decolonization and the trap of universality

砂野 幸稔*

SUNANO Yukitoshi

0. 『プレザンス・アフリケーヌ』と脱植民地化

『プレザンス・アフリケーヌ』は、アフリカ、とりわけフランス領アフリカ植民地の脱植民地化の過程で大きな役割を果たしたと言われ、筆者自身もそうした言説に与してきた (cf. 砂野 1997)。たしかに、『プレザンス・アフリケーヌ』は、英語圏の政治的パンアフリカニズムに対応する文化的パンアフリカニズムとして、西欧植民地主義の作り上げた黒人とアフリカの否認の言説に対して、アフリカと全世界の黒人の尊厳を高らかに主張しただけでなく、とくに 1950 年代から 60 年代にかけて北米の黒人解放運動とアフリカ人知識人による反植民地主義の動きが相互に呼応する場を生み出した。そして、そこに集った黒人知識人たちは、自分たちが脱植民地化の大きなうねりの中にいることを明確に自覚していた。

第二次世界大戦後アジア諸国の独立が相次ぎ、1954 年のディエンビエンフーにおけるフランス軍の敗北、1955 年のバンドン会議を経て脱植民地化への動きが決定的になりつつあった 1956 年、『プレザンス・アフリケーヌ』が主催した「第一回黒人作家芸術家会議」において、『プレザンス・アフリケーヌ』の創始者の一人であるエメ・セゼールは、「文化と植民地化」という講演を行い、黒人はアフリカの過去に回帰するのではなく、脱植民地化によって歴史的主体性を回復し、新しい文化を生み出さねばならない、と述べた (Césaire 1956)。さらに、1959 年の「第二回黒人作家芸術家会議」では、セゼールは「文化人とその責務」と題した講演を行い、次のように述べている。19 世紀は植民地化の世紀と言われたが、20 世紀は脱植民地化の世紀と言われることになるだろう。しかし、脱植民地化は自動的になされるものではなく、どのような脱植民地化でもよいわけではない。独立を迎えても、植民地構造に依存しながら新しい現実に適応することしか考えないのはよくない脱植民地化である。真の脱植民地化は、植民地構造を決定的に打ち砕くことを自らの責務とするものである。アフリカ人文化人は「よい脱植民地化」を準備しなければならない、と (Césaire 1959)。

しかし、それから 60 年以上を経た現代のサハラ以南のアフリカ、とりわけ旧フランス領アフリカ諸国の状況を見ると、これらのことばは空しく響く。大多数の国がいまだにフランス銀行によってユーロとの固定交換率を保障される CFA フランを通貨とし、マリやブルキナ

* アフリカ学会会員 (Japan Association for African Studies)

ファソのように軍事クーデタで成立した政権がフランスに対してフランス語で表明する憎悪に近い批判は、逆にフランスへの依存の深さを物語っている¹。とりわけ、文化の問題を考えると、現在も事実上フランス語のみを公用語、教育言語とし、教育も出版もフランスに大きく依存する現状を見て、旧フランス領アフリカが「歴史的主体性」を回復し、「よい脱植民地化」が実現した、と言えるだろうか。セゼール自身が政治家として長く率いたマルティニックは現在も海外県としてフランスに依存し続けている。そのようにしか実現しなかった脱植民地化に『プレザンス・アフリケーヌ』はどのように関与したのか、もう一度問うてもよいのではないか。

本稿が目的とするのは、この未完の脱植民地化について、『プレザンス・アフリケーヌ』に集った黒人知識人たちが脱植民地化の過程で論じた文化の問題、とりわけ言語の問題に焦点を当てて考えることである。と言うのも、サハラ以南のアフリカの脱植民地化にはひとつの特異性があるからである。「国語」の不在である。

近代の国民国家 (nation state) の理念型は、「国民 (nation) = 国語」という構図による国民統合であり、「ナショナリズム」には「国語 (national language)」の思想が重要な要素として含まれていた²。19 世紀のフランスや明治維新後の日本において強制的な「国語化」が行われたのはそのためだった。東欧やアジアのナショナリズムも、西欧型国民国家の理念型を踏襲し、広く通用する土着の言語による「国語」の形成を目指していた。アジアにおいても、ナショナリズムを率いたのは植民地支配者の言語で教育を受けたエリート層が多かったが、彼らは脱植民地化と「国民」統合のために土着の言語の「国語」化を目指した。インドやインドネシアのような多言語国家の場合も、独立運動を率いたナショナリストたちの構想では、土着の広域言語であるヒンドゥスターニー語やインドネシア語を「国語」とすることが目指されていた (cf. 砂野 2012)。

それに対してサハラ以南のアフリカでは、一時期を除いて植民地化を免れたエチオピアと、植民地期から地域行政言語として用いられていたスワヒリ語を「国語」として採用したタンザニア (ただし英語も公用語とした)、そして 1991 年に内戦で国家が崩壊したソマリアを例外として³、ほとんどの国で、政権を継承したアフリカ人エリートは植民地支配者の言語を公用語としてそのまま保持することを選び、行政機構だけでなく、教育制度も植民地支配者が作り上げた制度を引き継いだ。そして、とりわけ旧フランス領アフリカ諸国では、上述のように、行政、教育、そして書記文化におけるフランス語の占有状況は際立っている。

¹ 2020 年のマリ、2022 年のブルキナファソに次いで、2023 年 7 月にはニジェールにおいても軍事クーデタが起こったが、叫ばれるフランスへの憎悪は同じである。

² そうした「国民国家」が、内部の差異を排除する抑圧的なシステムであったことも事実である。

³ 1969 年に成立したシアド＝バーレ政権のもとでソマリ語のラテン語表記による国語化が強力に進められたが、1991 年からの内戦によって国家自体が崩壊した。ただし、ソマリランドなどの自治政治単位のもとでは現在も公用語として使用されている。cf. ソマリランド共和国憲法第一章第六条「言語」 (http://www.somalilandlaw.com/body_somaliland_constitution.htm#Heading)

少なくとも 1950 年代後半以降の『プレザンス・アフリケーヌ』は、脱植民地化によるアフリカ人の文化的主体性の回復を目指していたはずである。彼らは、脱植民地化によって実現されるべき「ネイション」－「ナショナリズム」は「ネイション」を希求する一形成について⁴、そして近代ナショナリズムに付帯する要素としての言語の問題についてどのように考え、対応しようとしていたのか。

脱植民地化が現実の目標となりつつあった 1950 年代に、『プレザンス・アフリケーヌ』において言語をめぐるどのような議論がなされていたかを検討し、目指されたはずの文化的脱植民地化がなぜ流産していくことになったのか、植民地支配者の本国の首都パリで発行されていた『プレザンス・アフリケーヌ』のあり方そのものを問題化することで、考えてみたい。

1. 1950 年代『プレザンス・アフリケーヌ』における言語をめぐる議論－アフリカ「諸ネイション」なのか「ネイション」としてのアフリカなのか

まず指摘しておかなければならないことは、『プレザンス・アフリケーヌ』においても言語問題は論じられていたということである。1947 年の創刊から 1960 年代初頭までの『プレザンス・アフリケーヌ』に掲載された論文や声明を通読すると、「言語」を「問題」として認識し、言語的脱植民地化を志向する議論が、少なくとも一部には存在していたことがわかる。

1.1. シェク＝アンタ・ジョップの初期論文－ウオロフ「ネイション」

興味深いのは、1948 年の第 4 号と第 5 号の二回に分けて連載されたシェク＝アンタ・ジョップの「ウオロフ言語学研究」という論文である。そこで展開される議論の概略は次のようなものである。

「ウオロフを古くからの民族⁵として考えるべきではない。周囲のいくつかの民族の言語との類似性を検討すると、ジョラ、プル（フルフルデー筆者註）、サラコレ（ソニンケー筆者註）との語彙の類似性を見いだせる。ウオロフ語とセレール語の間には強い類似性がある。では、それぞれは同じ祖語から来ているのか、それともどちらかからどちらかが生まれたのか。われわれの仮説は、セレールの地に外来者が到来し、その外来者がセレールの言語を学び、発声機関の違いからその発音を歪め、その結果ウオロフ語が生まれた、というものである。

⁴ 英語やフランス語で *nation* という用語が、本稿で問題化するナショナリズムとの関係で用いられるとき、既存の国家については「国民」という訳語がしばしば用いられ、帝国の支配からの解放と集団的主権の獲得が目指されるときには「民族」という訳語が当てられることが多いが、本稿の議論でも指摘するように、そもそも英語やフランス語においてもその概念は必ずしも明瞭ではない。それ故、本稿では、訳語による混乱を避けるために原則として「ネイション」という用語を用い、形容詞の *national(e)* も「ナショナル」とし、後述の「国民詩論争」や「民族文化」など、既訳からの引用などの場合は「国民詩 (*poésie nationale*)」や「民族文化 (*culture nationale*)」のように原語を添えることとする。

⁵ 原文では *race* ということが使われているが、ここでは民族 (*nation*)、あるいは種族 (*ethnie*) にあたる意味で用いられている。

トゥクルールやバンバラもウォロフと同様一枚岩ではないが、両者は起源がはっきりしているのに対してウォロフは起源がはっきりしない。われわれの考えるところでは、ウォロフ語はセレールの居住地に外来者が到来し、セレール語を歪め新しい語彙を加えることで生まれた。ウォロフは混淆の結果であり、ウォロフ民族は神話である。しかし、現在ではウォロフは、身体的、精神的、知的に一つの全体を構成し、民族を名乗る絶対的権利を獲得している。」(Diop, C.A. 1948a, 1948b - 筆者による要約)

ウォロフ語、フルフルデ語、セレール語は確かに同じ大西洋語群セネガンビア諸語に属するが、ジョラ語は大西洋語群北部諸語に属し、さらにソニンケ語はマンデ語派の一言語で大きく異なっており、現在の知識では承認できない議論が含まれているが、そのことよりも、そもそも何のためにこのような議論が展開されるのか、やや唐突な印象を与える論文である。しかし、ウォロフが他の「古い種族」と異なり、混淆によって成立した「新しい種族」である、という主張は、この論文の6年後にプレザンス・アフリケーヌ社から出版された『ニグロ諸ネイションと文化 (*Nations nègres et culture*)』で展開される議論を知るとき、その萌芽形態であったことが分かる。

同書で示されるジョップの思想は、脱植民地化後の「アフリカ連邦」の形成を展望するものだった (cf. 砂野 2005)。第二次世界大戦直後の当時は、ソ連とマルクス主義が新しい世界の希望として見られていた時代であり、ソ連をモデルとした多民族連邦国家を形成するというのがジョップの構想だったのだろう。古代エジプト文明の黒人起源を論じ、アフリカの文化的統一性を主張し、アフリカ諸言語の類縁性とその発展を主張するのも、ともにこの「アフリカ連邦」をイデオロギー的に、そして制度的に準備するという政治的意図にもとづくものだった。そして、同書の序文でジョップは次のように書いている。

エチオピア人、バンバラ人、ウォロフ人、ズールー人、ヨルバ人等はスターリンの(民族の一筆者註⁶) 定義に容易に当てはまるし、スーダン、コートディヴォワール、トーゴ、セネガル、ギニア、ニジェール、ケニア、南アなどには、《ネイション》の核が存在し、それが独立闘争の過程で強固なものとして形成されつつある。(Diop, C.A 1954: 21)

つまり、ジョップが48年の論文で示そうとしていたのは、ウォロフはセネガンビア地域における「ネイション」の核になり得る、ということだったのである。こうした主張がこの時点で『プレザンス・アフリケーヌ』周辺のアフリカ人知識人たちにどの程度受け入れられて

⁶ スターリンは1913年の「マルクス主義と言語問題」という論文で、「民族(ナーツィア /нация)」を次のように定義している。「民族とは、言語、地域、経済生活、および文化の共通性のうちにあらわれる心理状態、の共通性を基礎として生じたところの、歴史的に構成された、人々の堅固な共同体である」(田中 2000:48)。そして、ここで言われる「民族」とは近代の国民国家の主体となり得る「民族」を意味している。つまり「国民」である。

いたかは定かではないが、この論文の掲載は、ジョップが後の『ニグロ諸ネイションと文化』へと、さらに先に進むことを後押ししたことは確かだろう。

そして、『ニグロ諸ネイションと文化』出版後には、少なくとも『プレザンス・アフリケーヌ』周辺のパリの若いアフリカ人知識人の中核を占めていたセネガル人たちの中に、彼の主張を（必ずしも十分に理解せずに）強く支持する者たちが現れている。それを示す一例が、1955年から57年にかけて誌上で行われた「国民詩（poésie nationale）」論争におけるダヴィッド・ジョップとムスタファ・ワッドの議論である。

ただ、彼らの語る「言語」は、ウォロフ語など具体的な何らかの言語を指し示すものではなく、シェク＝アンタ・ジョップの議論の重要な要素となっていた「ネイション」は、彼らの議論では「ネイション」としてのアフリカへと拡張されている。

1.2. 「国民詩論争」と言語 — 「ナショナル」とは何か

「国民詩（poésie nationale）論争」とは、ハイチ出身の詩人ルネ・ドゥペストルに対するエメ・セゼールの批判詩を端緒に、1955年の第4号から1956/57年の第11号まで誌上で行われた議論である。これは文学についての議論だが、当時は文学が社会変革の先頭に立つという意識が強かった時代であり、文学を語ることは政治そのものだったことを想起する必要がある。

この「論争」は、フランス共産党系文芸誌『フランス文芸』編集長であったルイ・アラゴンの「形式的個人主義」批判へのドゥペストルの「屈服」と、それに対するセゼールの批判詩に端を発していた。アラゴンが「ランボー主義」と呼ぶ「形式的個人主義」を批判し、民衆が口ずさみやすいソネやアレクサンドランなどの定型詩に回帰すべきだと主張したのを受けて、ドゥペストルが自らの「形式的個人主義」を自己批判し、アラゴンに追随したのに対して、セゼールがアラゴンの同化主義を批判し、フランス詩の「伝統」になど従う必要はないとドゥペストルの「転向」を批判したのである（Césaire 1955a）。一般的に理解されている構図は、黒人詩人はフランス詩の伝統に従うのか、そんなものに縛られる必要はないのか、というものであり、それについてカリブ、アフリカの詩人、作家たちが賛否の議論を展開したというものである。「論争」というのにはあまりにも一方的で、最終的にはドゥペストルが自らの非を認めたという编者（アリウン・ジョップ）の総括で終結している（Présence Africaine 1957）。

しかし、「ネイション」と言語をキーワードにしてこの論争を見ると、当時の論者たちが必ずしも意識していなかった別の問題が見えてくる。「ネイション」については、ドゥペストルがハイチを自らの「ネイション」として明確に措定していたのに対して、それ以外のほぼ全員が、対白人概念としての「アフリカ人」あるいは「黒人」というぼんやりとした枠組みでしか語っておらず、言語については、ドゥペストルを除けば、後述するダヴィッド・ジョッ

プとムスタファ・ウッド以外は、フランス語を自明の所与としてとらえ、何の留保も行っていないということである。

編集部による「論争」の導入文に、問題の発端となったドゥペストル自身の文章が引用されているが、それを見ると、ドゥペストルがアラゴンから「学んだ」と思ったことは、自らの進むべき道はレジスタンスの詩人たちがフランス国民に愛唱されたようにハイチの「民衆のところにこだまする」詩を書くことだ、ということだった (cf. *Présence Africaine* 1955)。キューバのソンのリズムで社会の矛盾を歌ってキューバ革命の同伴者となったスペイン語詩人ニコラス・ギジェンが彼にとっての模範だった。しかし、キューバではスペイン語が民衆の言語であるのに対して、ハイチでは民衆の言語はクレオール語であり、ドゥペストルのフランス語を理解できるのはハイチでは特権階級だけである。その矛盾が彼の「国民詩」に刺さる棘だった。

1954年の第4号で、ドゥペストルはセゼールの批判への弁明を行うが、自らの問題を十分に対象化できていないために、その議論にはかなり無理がある。「クレオール語はハイチのアフリカ性を体現するが、ハイチのフランス語はフランス中世のラテン語のように上層階級の知的かざりにすぎない。しかし、階級闘争によって民衆的要素を統合すれば、フランス語はハイチの国民語 (*langue nationale*) になる。フランス語がハイチの国民語になるのであれば、フランス語の伝統に沿うのは自然だ」 (cf. *Depestre* 1955—筆者による要約) と彼は論じるのだ。

同じ号でセゼールは「国民詩—ナショナルな詩」などという問題設定そのものを否定し、「詩人が真にアンガジェしていれば、そしてその詩がよい詩であれば、アフリカ人の書いた詩はアフリカ詩以外の何ものでもあり得ない (*Césaire, 1955b:41*)」とするが、ドゥペストルの抱える言語問題は見事なまでに無視している。

他の発言者もセゼールのドゥペストル批判を支持するという点についてはほぼ一様だが、あたかも自明の概念であるかのように用いられる「ナショナル」という語についての理解は必ずしも一致しておらず、ドゥペストルにとっての棘となっている言語問題についてはさらに大きな違いがある。

アラゴンの「ナショナル」は、「人民の」あるいは「フランス民衆の」という程度のもので、彼にとってはまさに自明のものだったが、自らの「民衆」がそのフランス人によって植民地化された「民衆」であるとき、それは自明のものではなくなる。「国民詩 (*poésie nationale*)」の「国民 (*nation*)」とは、一体誰を指しているのか。そして、アラゴンの「国民詩」の言語は言うまでもなくフランス語であり、それは彼にとっては名指すまでもない自明のことだが、植民地化されたことによってフランス語を表現言語とすることになった者たちにとっては、それは本来自明のものでなどなかったはずである。

セゼールは、「ナショナルな詩」という概念そのものを拒絶するが、フランス語についてはアラゴンと同様にあたかも自明のものであるかのように語っている。詩を語る時、セゼー

ルは、ドゥペストルと異なり、マルティニックの民衆がクレオール語を日常言語とするという事実は足の裏についた米粒ほどにも意識していない。

サンゴール、ダディエはヨーロッパと対比された「アフリカ」を語り、「アフリカとフランスの間のクレオール」と自らを位置づけるデポルトは「アンティエユ」を語るが、彼らにおいても言語は問題化されず、フランス語が自明の言語となっている（Senghor 1955, Dadié 1956, Desportes 1956）。

セゼールの高校時代の師であり、すでにクレオール語の作品を発表していた一世代年長のグラシアンは、基本的にはセゼールに同意する形で「ナショナル」という枠組みに疑念を示しているが、彼の場合は、そもそもマルティニックが本国フランスとは別の「ネイション」であること自体を認めていない。彼はマルティニックにおけるフランス語とクレオール語の二言語状況について語るが、それはあくまでもマルティニック詩に独自の表現可能性をあたえるものとしてであり、ドゥペストルが語っていたような「国民語」という捉え方はない（Gratiant 1955）。

それに対して、「言語」を、全体の流れの中では一見場違いのような形で問題化したのがダヴィッド・ジョップとアマドゥ＝ムスタファ・ワッドだった。どちらも、議論の中心は、ドゥペストルの「屈服」を厳しく批判し、フランス定型詩など問題外であり黒人の独自の「ナショナルな」表現を目指すべきだという主張だが、二人にとってはフランス定型詩か否かという問題以上に、自分たちがフランス語という言語に依存していることが重要な意味を持っていたのである。

アリウン・ジョップの義弟にあたり、『プレザンス・アフリケーヌ』の第一期から若き反植民地主義詩人として鮮烈な登場を遂げていたダヴィッド・ジョップは、後にグギなどによって提起されるヨーロッパ語で書くアフリカ人作家の問題を先取りした先鋭な議論を展開している。彼は次のように論じる。

「アフリカ人詩人は、自らの同胞のものではない言語で歌うことによって、自らの国の〈深い歌〉を真に伝えることができないことを知っている。（中略）くびきから解放されたアフリカでは、いかなる作家も、再び見いだされた自らの言語以外の言語で、自らと自らの民衆の感情を表現することは考えもしないだろう。その意味で、フランス語表現のアフリカ詩は、自らの民衆から切り離されていることによって、歴史的に破綻している。しかし、そうした限界にもかかわらず、アフリカ人詩人は、自らが共に生き、その苦しみとたたかいを見た人間を描くことを選ぶことによって、われわれの国の将来の世代から忘れられることはないだろう。」（Diop, D. 1956 :115—筆者による要約、強調は筆者）

ダヴィッド・ジョップは、セネガル人を父に持つがフランスで生まれ育っており、おそらく母語はフランス語で、ウォロフ語などのセネガル言語がどの程度できたかわからない。そ

⁷ 実際、編者による「まとめ」では言語問題は完全に捨象されている（cf. *Présence Africaine* 1956）。

れ故、フランス語で書く自らを過渡期の存在としてとらえ、フランス語で書くアフリカ人としての自らの位置を厳しく見据える彼の議論は、強く響く。ただ、「再び見いだされた自らの言語」がどのようなものであるか具体性はなく、理念的なものにとどまっている。

アマドゥ＝ムスタファ・ワッドは、さらに踏み込んで、将来の独立アフリカの言語政策まで示そうとしている。彼の議論は大部分がドゥペストルの「屈服」への批判だが、最後に自分たちアフリカ人の選択としてシェク＝アンタ・ジョップを援用しながら次のように主張するのである。「われわれアフリカ人の場合は、シェク＝アンタ・ジョップが言ったように、アフリカの言語は現代の事象を表現し得るのだから、①a)アフリカ言語を研究し、b)単一のアルファベットを採用し、②われわれの芸術を豊富化し、③個別言語を超越し、単一の「国語」に到達しなければならない」(Wade 1956 :87—筆者による要約)、と。

しかし、ワッドの「単一の国語」も具体的な政治プログラムというより、決意表明のようなものであり、シェク＝アンタ・ジョップを援用した夢想に近い。アマドゥ＝ムスタファ・ワッドの母語はシェク＝アンタ・ジョップと同じくウォロフ語だが、彼はシェク＝アンタ・ジョップの語る「ネイション」としてのウォロフの「国語」を通り越して、まだ見ぬ将来のアフリカの「単一の国語」を語っているのである。

彼らの理解は、形成されるべき「国民(nation)」、主権国家の主体として形成されるべき「ネイション」というよりは、被支配人民としてのアフリカ人という、対白人概念としての「ネイション」であり、1948年の「ウォロフ言語学研究」や1954年の『ニグロ諸ネイションと文化』におけるシェク＝アンタ・ジョップの「ネイション」にあった具体性は欠落している。

1.3. 第二回黒人作家芸術家会議における「決議」

1959年に開かれた「第二回黒人作家芸術家会議」における報告を収録した『プレザンス・アフリケーヌ』第24/25号には、「われわれの文化政策」として、文学、政治学、哲学などの10の分科会決議と二つの動議が掲載されているが、そのひとつとして「言語学の決議」と題する決議が掲載されている。フランス領アフリカ諸国が一斉に「独立」して「アフリカの年」と言われた1960年の前年のことである。その内容は、「a)独立し連邦した黒アフリカは、いかなるヨーロッパ語もナショナルな表現(expression nationale)としては採用せず、b)ひとつの特権的なアフリカ語を選ぶ。アフリカ人はその国語および地域語を学び、選択として中等教育でヨーロッパ語を学ぶ」(Deuxième congrès des écrivains et artistes noirs 1959—筆者による要約)、というものである。

ここで展望されているのは、独立諸国家の連邦としてのアフリカ連邦である。おそらくシェク＝アンタ・ジョップやムスタファ・ワッドなどセネガルの若手知識人たちが起草したものだろう。ただ、ここでも、「ひとつの特権的なアフリカ語」の選択が掲げられるとき、達成されるべき「ネイション」は、具体性の欠如した夢想的性格を帯びることになる。

1.4. アリウン・ジョップの「開会の辞」とサキリバ論文

他方、『プレザンス・アフリケーヌ』においては、主要なアフリカ語の「国語」化を語る一方で、アフリカ人知識人たちが獲得した言語であるヨーロッパ語の保持の必要性、あるいは不可欠性を語る議論も存在していた。強烈な言語ナショナリズムを言挙げするムダヴィッド・ジョップやスタファ・ウッド、そして「決議」の議論とは一線を画し、より「現実的な」姿勢とも言えるが、ある意味では現状維持の正当化にもつながり得る議論でもある。

1956年の「第一回黒人作家芸術家会議」の「開会の辞」でアリウン・ジョップは言語の問題にも触れている。彼は言う。「アフリカ人文化人は、ヨーロッパ語で書くことで自らの文化、自らの民衆から切り離されていることを意識している。アフリカの多言語社会からも将来主要な言語が文化語として現れてくるだろう。ただ、ヨーロッパ語を放棄することはあり得ない。ヨーロッパ語は世界に向けて開かれてあるために必要なのだ」(Diop, A. 1956—筆者による要約)、と。

また、1957年の12号と13号の二回にわたって掲載されたD.F.サキリバの「アフリカ諸言語の現在と未来」という長文の論文は、現在の知識から見ても水準の高い、視野の広い議論を展開しているが、他方で、ムスタファ・ウッドの主張や後の「決議」の主張の性急さを諷める内容ともなっている。サキリバの議論の概要は次のようなものである。

「アフリカの言語はたしかに多様だが、西アフリカにはハウサ、ヨルバ、マンディングなどの大言語グループがすでに存在し、植民地化以降、交易と人の移動によって各地域で共通語が成立している。植民地支配はアフリカ諸言語の発展を阻害し、とくに同化政策が行われたフランス領ではアフリカ諸言語の近代化ははなはだ遅れている。しかし、ラテン文字を用いて言語を近代化したインドネシア語、トルコ語のように、アフリカ諸言語も同じことができるはずである。しかし、憎しみから英語やフランス語を廃棄することは間違っている。二公用語政策が考えられる。インドのように暫定的に英語を国際公用語、ヒンディ語を国語とすることも考えられるし、フランス語とアラビア語を公用語とするシリアやレバノンのようにそれを恒常化することもあり得る。たとえば将来のセネガル共和国ではウォロフ語とフランス語を公用語とすることが考えられる。(アフリカ連邦のような一筆者駐)多民族政体が実現した場合、単一の言語の選択はあまり現実的ではない。複数公用語の選択が考えられる。スイスやベルギーのような並立型、ソ連のような連邦型が考えられるが、現時点では仮定の段階にとどまる。」(Sakiliba 1957—筆者による要約)

サキリバは、西アフリカの言語状況をかなり正確に把握しているだけでなく、トルコ、インド、中国や中東の新興独立国の言語政策にも通じており、独立後のアフリカ諸「ネイション」の公用語についての議論も言語政策論として成り立ち得るものである。ただ、専門家が俯瞰的な立場から政策メニューを提示するような筆致からは強い政治的メッセージは感じられない。

そして、こうした「将来の可能性」を語る議論は、政治的「独立」がともかくも達成された後も、同様の形で続けられることになる⁸。

2. 「よくない脱植民地化」と「大きなアフリカ」の幻影

結局、シェク＝アンタ・ジョップが提起し、ダヴィッド・ジョップやムスタファ・ウッドが追随し、「決議」でも高らかに謳われた「国語」の擁護と顕揚は、現実の脱植民地化の政治過程に関与することはなく、旧フランス領アフリカ諸国はすべて、独立後フランス語を唯一の公用語とし、その状態が現在まで続くことになる。『プレザンス・アフリケーヌ』で言挙げされた言語ナショナリズムはどこに行ったのか。

2.1. 「よくない脱植民地化」

『プレザンス・アフリケーヌ』で言挙げされた言語ナショナリズムが、現実の脱植民地化の政治過程に関与することができなかつた第一の要因は、脱植民地化そのものが、まさにセゼールの言う「よくない脱植民地化」であったということであろう。

アフリカにおける脱植民地化は、旧イギリス領、旧フランス領を問わず、ほとんどの場合、植民地体制を払拭した新たな統治の開始としてではなく、植民地体制のなかで既得権を持っていた植民地エリートへの、既存の統治システムと統治権力の委譲として実現した。新たな国家の指導者たちにとって最重要の課題は、まず英語やフランス語で行われていた行政を引き継いだ上で、自らの権力基盤を確保することだった。対白人ナショナリズムの観点からの「べき論」としては誰も否定しない文化的そして言語的脱植民地化の優先順位は低かった。

それでも、旧イギリス領の場合は、現在のタンザニアなど東アフリカ植民地においてスワヒリ語を書記言語として整備し、行政言語としても使用していたのをはじめ、キリスト教宣教師などが主要言語を書記化していたことから、ナイジェリアのハウサ語、ヨルバ語などをはじめ主要なアフリカ諸言語の使用はその後かなり広がっている。タンザニアがスワヒリ語の公用語化とその全国民への普及に成功したのは、ニエレレをはじめとするタンザニアの指導者たちがスワヒリ語を国民統合の言語として重視し、独立の高揚感のなかで大規模な普及キャンペーンを行ったからだが、それを可能にしたのは、スワヒリ語がすでに植民地体制下で書記言語としてある程度整備され、行政言語としても用いられていたからだった (cf. 梶・砂野 (編) 2009)。

それに対して旧フランス領アフリカ諸国では、そうしたことはほとんど行われず、書記言語として多少なりとも整備されたアフリカ諸言語は存在しなかった。書記言語としてまったく整備されていない言語を「国語」として整備することは、サキリバが考えたように容易な

⁸ たとえば Ki-Zerbo (1961)、Diagne (1963)、Ireere (1963) など。1968年の67号ではアフリカ諸言語についての特集が組まれているが、英語、フランス語に代わってアフリカ諸言語を「国語」化するような議論はもはやなく、教育普及や文化保持が主要な論点になっている (cf. *Présence Africaine* 1968)。

ことではなかった。後述するギニアの 8 国語政策が失敗に終わったもっとも大きな理由は、そうした条件の下で「国語」政策が「べき論」のみで強行されたことにある。

旧イギリス領とのもうひとつの大きな相違は、脱植民地化の政治過程がおもにどこで進行したかということにもある。すでに述べたように、旧イギリス領でも旧フランス領でも脱植民地化の政治過程は植民地エリートへの植民地体制の委譲として進行した。しかし、個別植民地ごとに「自治」政府が存在し、脱植民地の過程も個別植民地ごとに進行した旧イギリス領と異なり、旧フランス領では脱植民地化の政治過程はパリで進行した。ウフェ・ボワニやサンゴールらアフリカ人指導者たちは、当初は本国の政党への所属を通してそれぞれの要求を実現しようとし、その後も本国政府との密接な関係を保ち続けた。中心的指導者だったサンゴールやウフェ・ボワニは、それぞれフランス本国政府の国務大臣も務めている。そもそも彼らの当初の構想の中ではフランスからの離脱は問題外で、第四共和政下での当初の要求はアフリカ植民地がフランス本国とより対等の権限を持つことを求めるものであり、自治や独立が射程に入り始めたのはアジア、そしてマグレブ諸国が独立を達成した 1950 年代半ばに入ってからのことにはすぎない (cf. 砂野 2006)。

2.2. 「大きなアフリカ」 — 政治プログラムとしてのフランス語

「国民詩」論争でも見たように、脱植民地化の政治過程を主導したサンゴールらの黒人エスタブリッシュメントだけでなく、『プレザンス・アフリケヌ』に集った多くのアフリカ人知識人たちは、しきりに「アフリカ文化」を言挙げする一方でフランス語使用を自明視していた。しかし、それだけではない。『プレザンス・アフリケヌ』の主要な支援者であり寄稿者でもあったサンゴールは、フランス領アフリカの脱植民地化過程で重要な政治的役割を果たしているが、彼の政治プログラムではフランス語こそが主要な位置を占めていた。

脱植民地化の流れが不可逆的になっていった 1950 年代後半になると、サンゴールの政治構想は、個別植民地がバラバラに独立する「バルカン化」を回避し、フランス領西アフリカという広域行政単位を維持するとともに、植民地支配という不平等な関係を清算することによって、「フランス共同体」を、フランスと旧植民地諸国がフランス語を紐帯として平等な立場で構成する連邦国家に生まれ変わらせる、というものになっていた。サンゴールは、フランス領西アフリカという政治単位を、フランス語を通してひとつの「国民 (nation)」として立ち上げることを考えていたのである。彼はフランス語という「国語」を持ち、フランスと対等な「大きなアフリカ」を展望していた。しかし、小さな単位に分割することで影響力を保持し続けることを望むフランス本国政府と、フランス領西アフリカの首都ダカールを擁するセネガルのサンゴールに主導権を握られることを望まないコートディヴォワールのウフェ・ボワニの画策によってその構想が潰え、旧フランス領アフリカが政治的にも経済的にも自立の困難な小さな単位に分割された「独立国」となったあとも、サンゴールはフランス語

という紐帯に強いコミットメントを保持し続け、後に「フランコフォニー」というひとつの政治プログラムを主導することになる⁹。そして、「大きなアフリカ」という「ネーション」を展望していたのはサンゴールだけではなかった。

2.3. 「大きなアフリカ」の幻影 — 政治的基盤のないパンアフリカニズム

サンゴールらに批判的で、社会主義的パンアフリカニズムを志向していたギニアのセク・トゥーレやマリのモディボ・ケイタ、そしてダヴィッド・ジョップやムスタファ・ワッドなどが所属していた在仏黒アフリカ人学生連盟 (FEANF) なども、「大きなアフリカ」を志向していた。彼らの「ナショナリズム」も、白人支配に対する「アフリカ人／黒人」の「ナショナリズム」だった。

パンアフリカニズムが北アメリカ黒人エリートの運動から、実際に植民地主義を揺り動かす運動へと変質したのは、1945年の第五回パンアフリカ会議が植民地支配からのアフリカの解放を掲げ、ンクルマがガーナに帰還して現地における運動にその理念を流し込んだことによる。1957年のガーナの独立、そしてンクルマのイニシアチブで1958年に相次いで開催された第一回「アフリカ独立諸国会議」、および「全アフリカ人民会議」は、フランス領アフリカにも大きな影響を与えた。FEANFも、とくにガーナの独立以降、パンアフリカニズム志向を明確にしている (cf. Traore 1985)。そして、セク・トゥーレやモディボ・ケイタが志向していたのも「大きなアフリカ」だった。

1958年にドゴールが「フランス共同体」への参加を問う国民投票を行った際、セク・トゥーレが「隷属の中の富裕より自由の中の貧困を選ぶ」という演説を行い、ギニアが圧倒的な「ノン」を投じて独立を選んだことは有名だが、セク・トゥーレが批判していたのはドゴールの「フランス共同体」案が、フランス領アフリカ植民地を小さな個別植民地に分割し、フランス本国への従属を永続化するものであることだった。フランス領アフリカ植民地の「バルカン化」を批判することにおいては、セク・トゥーレもモディボ・ケイタもサンゴールと同様だった。モディボ・ケイタが当初セネガルと「マリ連邦」を形成しようとしたのも「大きなアフリカ」への志向ゆえだった。ちなみに、ギニアとマリは1960年末、将来の「アフリカ諸国連合」に向けて、ンクルマのガーナと「ガーナ・ギニア・マリ連合」を形成している。

セク・トゥーレの有名な「ノン」は、いわば売り言葉に買い言葉的なものであり、ドゴールによる悪意に満ちた報復がなかったとしても、政治的にも経済的にも独立国として自立してゆくための準備も満足にない無謀とも言える決断だった。ギニアは、国内の主要なアフリカ諸語の「国語」化を行った先駆的な例として紹介されることもあるが、それも十分な準備も満足な政策資源もなく政治的スローガンだけが先行したものだ¹⁰。1958年の独立以

⁹ 詳細については、砂野 (2006) 第2部第2章を参照。

¹⁰ そもそもフランス語で書かれた1958年のギニア憲法には言語に関する規定はなく、国家の制度自体はギニアにおいても実質的にフランス語で運用されていた (cf. Leclerc 2015)。

来の政治経済の混乱と政権の独裁化のなかで、1968年によく始まった教育の「国語」化計画は、もともと教育制度そのものが満足に機能していない中で遅延し続け、1984年のセクトゥーレの死とクーデタによる政変によって放棄されている（カルヴェ 2010:186-190）。

フランス本国においてアフリカ人指導者たちやアフリカ人知識人たちは、支配する白人と支配される黒人、支配する本国フランスと支配されるアフリカという構図の中にいた。それゆえ、その支配の方程式を覆すためには「ネグリチュード」、そして「アフリカ」が言挙げされるのは必然であった。しかし、こうしてフランス語で「アフリカ」が言挙げされる時、「ナショナル」は曖昧化され、その「言語」は具体性を喪失していく。

1948年のシェク＝アンタ・ジョップの論文は、「民族」として生成しつつあるウォロフについて語っていた。それはウォロフ語という現に認知されている言語を話す一つの「ネイション」を語っていたのである。1954年の『ニグロ諸ネイションと文化』の時点でも、シェク＝アンタ・ジョップは、アフリカ諸民族の共通の起源を語りながらも、諸「ネイション」によって構成される「アフリカ連邦」を展望していた。しかし、その後、シェク＝アンタ・ジョップの議論は、『プレザンス・アフリケーヌ』における論考でも、出版社から刊行される著作においても、「アフリカの統一性」を語ることに力点が移行していく。すでに見たように、ダヴィッド・ジョップやムスタファ・ワッドの議論、そして第二回黒人作家芸術家会議における「決議」においても、主題はアフリカである。言語が問題とされているが、それはもはやサキリバの語ったような主要な民族の言語でも既存のリングフランカでもなく、「大きなアフリカ」のまだ見ぬ単一の言語である。

「ウォロフ言語学」を語っていた1948年のシェク＝アンタ・ジョップの構想は実践を生み出し、萌芽的なものにすぎないにしても1950年代から始まるアッサン・シラやシェク＝アリウ・ンダウらによるウォロフ語の書記化の試みや1959年の「ウォロフ語綴り字帳」の出版などの具体的な歩みが存在したが、英語圏のパンアフリカニズムに鼓舞された「大きなアフリカ」志向が「アフリカの単一の言語」を語り始めたことで、そうした実践は脱植民地化の政治の中では周辺化されていった¹¹。壮大な政治スローガンの前では、個別の「言語」の立ち上げに向けた地道な実践は、あまりにも卑小なものに見えたのかもしれない。

『プレザンス・アフリケーヌ』はアフリカの十把一絡げの否認に対して、アフリカのプレゼンスを示すことに確実に成功した。しかし、それはフランスにおけるアフリカのプレゼンス、そして英語やフランス語で論じられる「世界」におけるアフリカのプレゼンスであって、

¹¹ 「在仏セネガル人学生協会」の名で刊行された『ウォロフ語綴り字帳』から1970年代初頭のウォロフ語雑誌『Kaddu』に続くセネガルにおけるウォロフ語ナショナリズムの運動については砂野（2007）を参照。当時『ウォロフ語綴り字帳』などの活動に参加していた作家シェク＝アリウ・ンダウの証言によれば、この資金を提供したのは1959年当時セネガル自治政府の首相であったママドゥ・ジャだったという（2016年8月21日、ダカールのンダウの自宅における筆者によるインタビュー）。しかし、ジャは1962年にサンゴールによって排除され、「国語」としてのウォロフ語というプロジェクトは政治的後ろ盾を失った。

アフリカにおける言語文化的従属の克服と自立した言語文化の育成とは別問題だった。

3. 「借り物の言語」とフランスにおける「^{プレザンス・アフリケーヌ}アフリカの現前」

実は、すでに創刊号において、二人の後援者がこの雑誌の使用言語が他ならぬ植民地支配者の言語であることに注目している。しかし、その後『プレザンス・アフリケーヌ』においてそれが再び問題化されることはなかった。

創刊号の冒頭を飾ったのは、フランス人後援者の中でももっとも高名で、その年ノーベル文学賞を受賞したばかりのアンドレ・ジッドによる「序言」である。ジッドは、「理解のあるヨーロッパ人知識人」のパターナリスティックな語りながら創刊を励ましつつ、しかし一つの危惧を記している。

この雑誌はわれわれが語るべきと信じることを黒人諸人民に語りかけるためのものであるが、それにもまして、彼らがわれわれに向けて語る機会を与えるためのものである。どうか、その際、立ちほだかることが危惧される困難が乗り越え不可能なものではないことを願う。ニグロの音楽と具象芸術はわれわれの文化から何一つ借用することなく直接自らを示し得るのに対して、ここでは、われわれに語りかけ、われわれに理解され得るためには、借り物の道具であるわれわれの言語に頼るしかないのだ。(Gide 1947: 5-6、強調は筆者)

この「借り物の道具」について、同じ創刊号に「^{プレザンス・ノワール}黒い現前」という文章を寄せたサルトルは異なった見方を示している。『プレザンス・アフリケーヌ』が、コンゴやセネガルの黒人の境遇を公正に伝えてくれることを期待する」とした上で、サルトルもこの雑誌がフランス語で発行されることについて次のように言う。

われわれではなくイギリス人がセネガルを占領していたら、セネガル人は英語を使っていたら。 (中略) 一つの外国語が彼らに住み着き、彼らから思考を奪い去る。しかし、彼らはこの強奪に抗して自らと向き直り、ヨーロッパのこのおしゃべりを自らの内でコントロールし、言葉に裏切られることを受け入れた上で、この言語に自らの印を刻みつけるのである。(Sartre 1947: 29)

サルトルがジッドの序言を読んだ上でこの文章を書いたかどうかは定かではないが、内容的には、「借り物の道具」を用いる黒人が自らの主体性を示せるかどうかを危惧するジッドに対して、いや、黒人はフランス語に支配されるのではなく、わがものとしてコントロールしているのだ、と応答しているように読める。しかし、そのサルトルも、いつの日か、別の場

所、つまり他ならぬアフリカで、フランス人が理解できない「彼らの言語」が立ち上がってくることは考えていない。

ジッドの序言に続く「理解あるフランス人」への配慮に満ちたアリウン・ジョップの刊行の辞に如実に表れているように (cf. Diop, A. 1947)、1954年に一旦中断される第一期『プレザンス・アフリケーヌ』が植民地主義批判がまだ危険思想でさえあった時代を反映していたのに対して、1955年に再開される第二期『プレザンス・アフリケーヌ』は、フランスへの愛着を隠さないアリウン・ジョップ自身も反植民地主義、反人種主義の立場を明確にするなど、黒人知識人が世界の黒人に向けて語るという性格を色濃くしていく。しかし、植民地宗主国フランスにおいてフランス語で「^{プレザンス・アフリケーヌ}アフリカの現前」を語るというあり方は変わらなかった。『プレザンス・アフリケーヌ』に集った黒人知識人たちは、本当にこの「借り物の道具」を「コントロール」しえたのだろうか。

ルイ＝ジャン・カルヴェは、『言語学と植民地主義』において、植民地主義が植民地に持ち込んだ宗主国言語は、植民地に「排除の領域」を形成する、と論じている。言語が富と権力の寡占の資源となり、言語の選択は、「誰に向けて語るか」を方向付ける、と (カルヴェ 2006:78-79)。確かに『プレザンス・アフリケーヌ』はフランス人に対してだけではなく、同じフランス語を用いるアフリカ人知識人に向けても語りかけている。しかし、彼らフランス語エリートの思考の場が、フランス語世界、つまりフランス語を通して開かれる「世界」であり、フランス語を理解しない各地のアフリカ人民衆の生きる場ではなかったことだけは確かである。

支配者の言語で、とりわけパリという他者の土俵で議論が行われている状況は大きな問題を孕んでいた¹²。『プレザンス・アフリケーヌ』は、ジッドが危惧しサルトルがそれを打ち消そうとした、他者の言語であるフランス語への依存、フランスの出版文化への依存の問題を当初から抱えていたが、『プレザンス・アフリケーヌ』に集った多くのアフリカ人知識人たちは、少数の例外を除いてその事実と正面から向き合おうとはしなかった。

『プレザンス・アフリケーヌ』の同伴者でもあったフランツ・ファノン¹³が、『地に呪われた者』において、『プレザンス・アフリケーヌ』とそこに集うアフリカ人知識人たちに対して示した苛立ちは正当だった。

¹² 同じ植民地宗主国言語ではあるが、イギリスとフランスのアフリカ諸言語に対する対応の違いだけでなく、それぞれの言語の文化中心のあり方の違いについても指摘しておく必要があるだろう。英語の場合は、20世紀後半には、アフリカを植民地支配していたイギリスを凌駕し、北アメリカが大きな文化中心になっている。また、アフリカにも南アフリカ、ナイジェリアをはじめとして、地域のアフリカ人による英語文化が早くから存在し、活発な出版活動が行われていた。それに対してフランス語圏では、パリのみが文化中心であり続けている。ケベックがもうひとつのフランス文化の発信地になっているが、その存在感はオーストラリア、インド、南アフリカの英語文化の存在感にもおよばない。フランス語文化はいまもパリを中心としているのである。

¹³ ファノンは『プレザンス・アフリケーヌ』が主催した二回の「黒人作家芸術家会議」の報告者であっただけでなく、初期からの読者でもあった。彼が『黒い皮膚白い仮面』の第一章においてシェク＝

原住民知識人は、文化的な仕事をしようなどと腐心しているまさにその瞬間には、自分が占領者からの借り物の技術と言語を使用しているのだということが分からない。(中略) 文化的な作品を通じて民衆のもとに復帰する原住民知識人は、実際には、異邦人のごとくに振る舞っているのだ。(ファノン 1969: 127)

しかし、そのファノン自身、彼がその「民族解放」に参加しているはずのアルジェリア人民の言語を理解せず、彼らが理解しない「占領者」の言語であるフランス語で語っている。それにもかかわらず自らが「異邦人」ではないことを自らに納得させるためには、より高次の次元での合流が必要となる。それはもはや黒人でもアルジェリア人でもなく、すべてを乗り越えた「新たな人間」である¹⁴。

ファノンの師だったセゼールも、すべてを俯瞰できるより高次の普遍を展望していた。セゼールの『帰郷ノート』がフランス語で到達した「異例の高み」(ファノン 1969:125) は、「黒い穴」を見下ろす普遍の場だった。白い似而非普遍を乗り越えたより高次の普遍である (cf. 砂野 1984)。

4. フランス語文化の罨としての普遍主義

フランス語で「アフリカ」を語るこれらの黒人知識人たちは、政治的立ち位置の違いを越えて、フランス語とともに内面化したフランス的「普遍」に呪縛されていた。カリブ海出身のセゼールやファノンだけではない。

たとえば、サンゴールの著作を読むとき、「普遍」や「普遍文明」ということばがいかにか彼にとって重要なものであったか、強く印象づけられる。彼にとって、ネグリチュードは、普遍文明に到達するための足場だった。ヨーロッパ文明、アフリカ文明、アラブ文明などの総合としての普遍文明である。サンゴールは『自由 (Liberté)』という共通表題を持つ5巻の著作集を刊行しているが、その第1巻『自由 1—ネグリチュードとヒューマニズム』の序文では次のように言っている。

1932年から1934年にかけての時代以来、われわれの関心、われわれの唯一の関心は、このネグリチュードを引き受け、それを生き、それを生き抜くことによってその意味を深めることだった。それを、普遍文明の建設のための礎として提示するために (Senghor 1964: 8)。

アンタ・ジョップの「言語学の研究」に対して「大きな関心を寄せる」と言うとき、言及されているのは本稿で紹介したジョップの最初の論文である (cf. ファノン 1970:31)。

14 『地に呪われたる者』は次のような文章で結ばれている。「ヨーロッパのため、われわれのため、人類のために、同志たちよ、われわれの脱皮が必要だ。新たな思想を発展させ、新たな人間を立ち上げようとして試みる必要がある。」(ファノン 1969:184)

第3巻のタイトルは『自由3-ネグリチュードと普遍文明』である (Senghor 1977)。

アリウン・ジョップの立ち位置も、やはり「普遍」的な場だった。『プレザンス・アフリケーヌ』創刊の辞でジョップは次のように言う。

ヨーロッパは、将来の文明全体の種を生み出す存在である。しかし、海外の人々（古い中国、思慮深いインドから、沈黙するアフリカにいたるまで）は、ヨーロッパによって豊穡化されるべき膨大な精神的資源を有している (Diop, A. 1947: 14)。

ここではヨーロッパが主体で非ヨーロッパは客体となっているが、目指されるのは新しい文明である。そして1959年の第二回黒人作家芸術家会議の開会の辞では、植民地主義の終焉を告げつつ、ネグリチュードは西欧との訣別ではなく、西欧に欠けているものをもたらすものであり、「西欧のエゴイズム、不完全さから普遍を救い出すことがわれわれの使命だ」としている (Diop, A. 1959:44、強調は筆者)。

ガーナのンクルマに続きアフリカの脱植民地化の先陣を切った独立ギニアの指導者として注目を集めていたセク・トゥーレの同じ会議での発言でも、「普遍」は「民族解放」の究極の到達点である¹⁵。

昨日までは他者の卑劣な行為の刻印を受け、普遍的な事業からは排除され、支配の実行によって劣等化されていたアフリカの人間、すべてを奪われ、自らの国で無国籍者とされ、自らの富の上に裸で無一物で座り込んでいたこの人間が、突如世界に再び現れ、人間としての完全な権利と普遍的な生への全面的な参加を要求するのである (cf. Touré 1959:111-112、強調は筆者)。

「普遍」は、『プレザンス・アフリケーヌ』に集い、フランス語で思索する黒人知識人を捉えて放さない。

20世紀末の国民国家をめぐる議論における優れた論者であった西川長夫は、『国境の越え方-国民国家論序説』において、対抗概念としての「文化」と「文明」について論じ、「文明」を語り自らを「普遍」の側に置くフランスに対して、ドイツは対抗概念としての「文化」を対置した、としている。彼は言う。

¹⁵ 「文化の代表者としての政治指導者」というタイトルのこの発言は、ファノンの『地に呪われたる者』第4章「民族文化」の冒頭にエピグラフとして引用された「アフリカ革命に参加するには一つの革命的な歌を書くだけでは十分ではない。この革命を民衆とともに遂行することが必要だ (後略)」という言葉がよく知られているが、引用文はその文章に続く文章である。

「文化」は特性、したがって個人や集団の独自性や国民のちがいを強調するのに対して、「文明」は普遍性を強調し、民族や国民性の相違にかんする主張をある程度まで後退させる。—したがって「文化」概念は文化的相対主義と同時に人種差別への道を準備し、「文明」はヒューマニズムと同時に植民地主義の口実を用意している、ということになるだろう。（西川 2001:89-190）

そして、西川はアラン・フィンケルクロートの次のような文章を引いている。

昔から、というより正確にはプラトンからヴォルテールにいたるまで、人間の多様性は普遍的価値の裁く法廷に出頭してきた。それをヘルダーがやって来て、多様性の司る法廷にあらゆる普遍的価値を裁かせたのである。

（・・・）多くの公国に分裂していたドイツは、フランスの征服に直面してみずからの一体性の意味を悟る。集合的アイデンティティーの昂揚が、軍事的敗北およびその代償としての恥ずべき服従の代償となる。国民はいままさに被っている屈辱を、みずからの文化の目も覚めるような発見で埋め合わせたのである（同書:215—フィンケルクロート『思考の敗北あるいは文化のパラドクス』からの引用）。

セゼール、サンゴールらネグリチュードの主唱者たちは、ドイツロマン主義を背景としたレオ・フロベニウスを足場としてアフリカ文化を宣揚した。しかし、ドイツロマン主義は、かつて彼らが絡め取られていた「普遍言語」としてのフランス語から身を引き離し、「ドイツ語」を立ち上げ、そこに回帰することで自らの他者性を実体化し、他者の眼差しに貫かれることなく、自己を語ることができたのである。それに対して、セゼール、サンゴールを始め、『プレザンス・アフリケーヌ』に集ったアフリカ人知識人たちは、フランス語から身を引き離すどころかそれを自らの基盤とし、フランスの出版文化に依存し続けることで、フランス的「文明」と「普遍」の同伴者となった。

1962年にセゼールはフランスのある雑誌のインタビューに答えているが、その中で「なぜクレオール語で書かないのか」と問われて、こう答えている。

クレオール語を蔑視するわけではありませんが、それは通用範囲がはなはだ限られた地方語であり、(中略)クレオール語を選ぶということは、いわば世界から切り離されるようなものだからです (Rédac Creoleways 2016)。

世界に対し「アフリカ」を語り、「普遍」を語り得る言語はフランス語なのである。

『プレザンス・アフリケーヌ』は、パリにおいて「アフリカのプレゼンス」を（パリから

世界に向けて「普遍」の名において) 語る場であり、それ以上でもそれ以下でもなかった。

脱植民地化は植民地宗主国の首都においてではなく、被支配者が生きる場でこそ実質化するべきものであり、言語文化的脱植民地化も同様である。

参考文献

- 梶茂樹、砂野幸稔(編). 2009. 『アフリカのことばと社会—多言語状況を生きるということ』三元社.
- カルヴェ、ルイ＝ジャン. 2006. 『言語学と植民地主義—ことば喰い小論』(砂野幸稔訳) 三元社. (Calvet, Louis-Jean. *Linguistique et colonialisme – Petit traité de glottophagie*, Paris, Payot, 1974)
- . 2010. 『言語戦争と言語政策』(砂野幸稔訳) 三元社 (Calvet, Louis-Jean. *La guerre des langues et les politiques linguistiques*, Paris, Payot, 1987)
- 砂野幸稔. 1997. 「第14章パンアフリカニズムとナショナリズム」、宮本正興、松田素二編『新書アフリカ史』、講談社: 445-470
- . 2005. 「セネガルにおける言語ナショナリズムの系譜」『熊本県立大学文学部紀要』64号: 17-43
- . 2006. 『ポストコロニアル国家と言語—フランス語公用語国セネガルの言語と社会』三元社
- . 2012. 「序論」、砂野幸稔編『多言語主義再考—多言語状況の比較研究』三元社: 11-48
- 田中克彦. 2000. 『「スターリン言語学」精読』岩波書店
- 西川長夫. 2001. 『増補 国境の越え方—国民国家論序説』平凡社
- ファノン、フランツ. 1969. 『地に呪われたる者』(鈴木道彦、浦野衣子訳) みすず書房 (Fanon, Frantz. 1966. *Les damnés de la terre*, Paris, François Maspero)
- . 1970. 『黒い皮膚・白い仮面』(海老坂武、加藤晴久訳) みすず書房 (Fanon, Frantz. *Peau noire, masques blancs*, Paris, Seuil, 1952)
- Césaire, Aimé. 1955a. « Réponse à Depestre poète haïtien (Eléments d'un art poétique) », *Présence Africaine*, Nouvelle série 1-2 :113-115
- . 1955b. « Sur la poésie nationale », *Présence Africaine*, Nouvelle série 4: 39-41
- . 1956. « Culture et colonisation », *Présence Africaine*, Nouvelle série 8/10: 190-205
- . 1959. « L'homme de culture et ses responsabilités » *Présence Africaine*, Nouvelle série 24/25: 116-122

- Dadié, Bernard. 1955. «Le fond importe plus », *Présence Africaine*, Nouvelle série 6 : 116-118
- Depestre, René. 1955. « Réponse à Aimé Césaire », *Présence Africaine*, Nouvelle série 4 : 42-62.
- Desportes, Georges. 1956. « Points de vue sur la poésie nationale », *Présence Africaine*, Nouvelle série 11: 88-99.
- Deuxième congrès des écrivains et artistes noirs. 1959. « Notre politique culturelle, Résolution de linguistique », *Présence Africaine*, Nouvelle série, 24-25 : 397-398
- Diagne, Pathé. 1963. « Linguistique et culture en Afrique », *Présence Africaine*, Nouvelle série 46 : 52-63
- Diop, Alioune. 1947. « Niam n'goura : ou les raisons d'être de Présence Africaine », *Présence Africaine* 1 : 7-14
- . 1956. « Discours d'ouverture », *Présence Africaine*, Nouvelle série 8-10 : 9-19
- Diop, Cheikh Anta. 1948a. « Etudes de linguistique oulovo – Origine de la langue et de la race valaf », *Présence Africaine*, 4 : 672-679
- 1948b. « Etude linguistique oulovo », *Présence Africaine*, 5 : 848-853
- 1954. *Nations nègres et culture*, Paris, Présence Africaine..
- Diop, David. 1956. « Contribution au débat sur la poésie nationale », *Présence Africaine*, Nouvelle série, 6 : 113-115
- Gide, André. 1947. « Avant-propos », *Présence Africaine* 1 : 3-6
- Gratiant, Gilbert. 1955. « D'une poésie martiniquaise dite nationale », *Présence Africaine*, Nouvelle série 5:84-89.
- Irere, Abiola. 1963. « Le problème des langues en Afrique », *Présence Africaine*, Nouvelle série 47: 218-223
- Ki-Zerbo, Joseph. 1961. « Enseignement et culture africaine », *Présence Africaine*, Nouvelle série 11 : 45-60
- Leclerc, Jacques. 2015. « Guinée-Conakry », *L'aménagement linguistique dans le monde*, site internet (https://www.axl.cefan.ulaval.ca/afrique/guinee_franco.htm) (consulté le 2 novembre 2023)
- Mazrui, Ali(ed). 1993, *General History of Africa. Vol. 8: Africa since 1935*, California, University of California Press/UNESCO
- Présence Africaine. 1955. « Un débat autour des conditions d'une poésie nationale chez les peuples noirs : Introduction », *Présence Africaine*, Nouvelle série 1-2 : 36-38.
- . 1957. « Conclusion », *Présence Africaine*, Nouvelle série 11 : 100-102

- Rédac Creoleways. 2016. « Aimé Césaire : Que pensait-il franchement du créole ? », *Creoleways* | *Le Magazine des Dynamiques Créoles*, Site Internet (<https://creoleways.wordpress.com/2016/02/23/aime-cesaire-que-pensait-il-franchement-du-creole/m>) consulté le 7 novembre 2023.
- Sakiliba, D.F..1957. « Présent et Future des Langues Africaines », *Présence Africaine*, Nouvelle série 12: 127-141 / 13: 65-73
- Sartre, Jean-Paul. 1947. « Présence noire », *Présence Africaine* 1: 28-29
- Senghor, Léopold-Sédar..1955. « Réponse », *Présence Africaine*, Nouvelle série 5: 79-83
- 1964. *Liberté 1, Négritude et humanisme*, Paris, Le Seuil.
- 1977. *Liberté 3, Négritude et civilisation de l'universel*, Paris, Le Seuil.
- Touré ,Sékou. 1959. « Le leader politique considéré comme le représentant de la culture », *Présence Africaine*, Nouvelle série 24/25: 104-115
- Traore, Sékou. 1985. *La Fédération des Étudiants d'Afrique Noire en France, (FEANF)* , Paris, L'Harmattan
- Wade, Amadou Moustapha.1956. « Autour d'une poésie nationale », *Présence Africaine*, Nouvelle série 11: .84-87